



宮城県気仙沼市で、2014年2月末に実施された「気仙沼うんめえもんツアー」で、牡蠣やホタテの養殖、ワカメ漁を体験する参加者たち。被災地内外の人が一緒に復興にかかわるきっかけをつくろうと、官民一体となって企画され、全国からたくさんの方が集まりました。詳細は P2 参照

東日本大震災発生から3年

2011年3月11日の東日本大震災発生から3年が経ちました。

被災地では、住まいの再建や土地のかさ上げ、人口流出、被災者の心のケアなど、今も多くの課題が山積し、まちの復興に向けてまだ長い道のりが続くことが予想されます。復興に時間がかかるほど、被災した人々それぞれの生活再建のスピードにも差が出てきています。被災直後は避難所となつた体育館や仮設住宅などである程度同じ復興段階を歩んでいても、3年が経ち、まちを離れて新しい生活を始めた人、残つて家を建て直す人、再建の目的が経たず引き続き仮設住宅での生活を余儀なくされる人などさまざま、支援ニーズの多様化に伴い復興支援活動もより複雑化しています。

私たちシビックフォースは発災直後からこれまで、緊急物資の調達・配送をはじめ、離島を救うカーフェリーの就航やお風呂の設置・運営、コンテナ・トレーラーハウスの貸与、社員ボランティア派遣など復興段階によって変わるニーズに少しでも応えようと、多岐にわたる支援活動を展開してきました。2012年夏からは、宮城県気仙沼市を拠点に、被災地の

復興を中長期的な視点でサポートする「中長期復興支援」を開始。「観光再生」「へりによる緊急医療搬送支援」「再生可能エネルギー」「復興まちづくり」「若者支援」の5つのテーマを掲げてプロジェクトを展開中です。これらのプロジェクトは、いずれも域内外のこれまでのネットワークを生かしつつ、地域の再生を目指す方々の主体的な動きをサポートしてきました。

また、2011年4月から続けてきた「NPOパートナー協働事業」では、災害時に専門性を発揮する団体や被災地で活動する団体などとともに、緊急支援では行き届かなかったニーズに広く対応してきました。昨年からは、支援が遅れがちな福島からの避難者支援なども開始しています。

東日本大震災発生以来、毎月11日に発行してきたマンズリーレポートも今回で36回目を迎えます。これまで活動を続けてこられたのは、ほかでもない皆様の多大なるご支援の賜物と心より深く感謝いたしております。この場を借りて改めてお礼申し上げますとともに、引き続きご関心をお寄せ頂きますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

Monthly Topics

Civic Force の複数の事業の中から、注目のトピックをお知らせします。

東北からフランスへ 復興イベントに出席

東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県気仙沼市で、震災後の2011年11月から毎年実施されている「東北マルシェ」。被災した生産者の多くが、店を失うなど厳しい環境下で不安を抱えるなか、地元NPO・ネットワークオレンジとシビックフォースとの協働事業として始まり、昨年10月に開催された3回目のマルシェでは、フランスのコスメティックブランド「ロクシタン」の協力を得て、「社会起業家コンテスト」を同時開催しました。コンテストでは、マルシェに参加した24団体のうち、社会性や新規性などに優れた2団体が選ばれ、3月1日〜約1週間、フランスで実施された研修に参加しました。

フランスでは、マルシェの本場・南仏プロヴァンスの伝統的なフリーマーケットやアンティーク市、皮革加工職人工房などを視察したほか、パリ日本文化会館で3月4日から15日まで開催中の展示会に出席。同時開催されたシンポジウムで、ロクシタン本社のレイノルド・ガイガー会長などとともに登壇し、東日本大震災の被害状況や、それぞれの復興に向けた取り組みなどを報告しました。

コンテストで準優勝し、登壇したカネダイの熊谷公男さんは、「復興に向けたビジネスは、震災前とは異なる新しい方法でやらなければならぬが、重要なのは志を同じくする仲間がどれだけのいるか。たくさんの方の支援に応えるためにも今のビジネスの成果を上げたい」と話しました。

また、「ほごーる」の清水さんと木田さんは、ロクシタン工場で開催された販売会で、着物布を使った和小物を販売。「フランスの人に受け入れられるか不安だったが、明るい色の小物やフランスの本のサイズに合わせ作ったブックカバーが好評だった」と言い

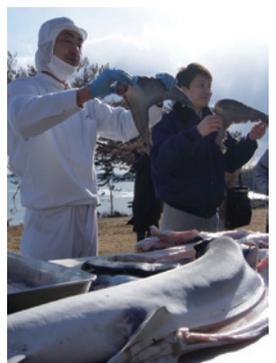


地元へ深く触れる旅 「うんめえもんツアー」

宮城県気仙沼市で、2月22〜23日の2日間、「気仙沼うんめえもんツアー」が開催され、全国から30人が参加。サメの解体ショーや東日本大震災被害の調査・記録を続ける「リアスアーク美術館」、俳優・渡辺謙さんが建てたカフェなどを視察したほか、ワカメ漁体験や地元食材を使った郷土料理を堪能しました。

企画したのは、気仙沼の観光復興のために官民一体となって立ち上がった「チーム気仙沼」。観光協会や商工団体、まちづくり団体、農水産関係者など約40団体で構成され、このうち昨年シビックフォースも立ち上げにかかわった「リアス観光創造プラットフォーム」は、市の観光課と連携し、チーム気仙沼の運営事務局を担っています。ただ美味しいものを食べるだけでなく、地元に触れて人々と深く交流する点特徴で、「参加者も一緒に復興にかかわる」きっかけにしておらうと、モニターツアーとして実施されました。

この取り組みは、シビックフォースがこれまで関わってきた気仙沼市観光戦略会議やリアス観光創造プラットフォーム立ち上げなどの延長上にあり



被災地内外のたくさんの方々の思いが一つの形になったと言っても過言ではありません。気仙沼市観光課の島山幹司課長補佐は「たくさんの方に支えられて、ようやく形になってきた。こうした取り組みをどんどん続けていかなければ」と語っています。

フィリピン中部台風支援 野菜の種を配布

昨年11月に発生した台風30号で甚大な被害を受けたフィリピンに対し、シビックフォースはフィリピンのパートナー団体「CDRR(Citizens' Disaster Response Center)」とその地域支部LCDE(レイテ開発センター)などと協力し、被害の大きかったレイテ島などで発災直後から支援活動を継続して展開しています。

2月19日から改めてスタッフを派遣し、レイテ島北部アランアラン市のタバングハイ、サル



バシオン・ファーム、ランギット3地区で、農具を失った農家の方々が農業を再開できるように米や野菜の種、農具を計806世帯に届けました。

スリランカで

防災能力強化をサポート

シビックフォースがアジア各国の災害支援関連団体と協力して2012年10月に設立した「アジアパシフィック アライアンス」の加盟国の一つ、スリランカで、2月から防災能力強化事業を開始しています。

具体的には、スリランカ国内で活動しているNGOのネットワーク組織「CHA (Consortium of Humanitarian Agencies)」と協力し、災害が頻発するスリランカのコミュニティの災害対応能力の強化や、行政機関、企業と連携しながらコミュニティ・地方・中央レベルの連携体制を構築し、被災の軽減や被災地の復興につなげる活動を進めていきます。



今後の東北復興支援活動について

ごあいさつ

東日本大震災発生から2年前の2009年、シビックフォースは、地震などの大規模災害が起きたとき、NPO、企業、行政などの連携によって迅速で効果的な被災者支援を実現するために設立されました。東日本大震災では、まさにこの「連携の力」によって大規模な支援活動につながりました。

東北では、現在も地元行政やNPO、企業などと連携し、被災地のニーズに沿った支援を実施していますが、被災地では今も多くの課題が山積し、引き続き支援の要請が寄せられています。特に福島県では、原発事故の影響で避難生活が長期化し、被災地に残ることを決意した人、県外で暮らすことを決めた人、それぞれが多くの苦難を強いられています。福島の課題は、福島の人だけでなく、移住や除染の問題など日本人が共に考えなければならない山積しています。



Civic Force 代表理事
大西健丞

私たちはこれまで主に宮城県を拠点に地域のまちづくりにかかわり復興の動きを後押ししてきました。同時に福島でも被災者の心のケアや被災犬の保護、避難者の移住サポートなどを続けてきましたが、今後は今まで培ってきた経験と人脈を最大限に生かし、復興が遅れがちな福島でも、活動を強化していきます。

具体的には、避難者の移住サポートを続けていくほか、地元福島の若者が復興の活力となる一歩を踏み出すための取り組みや、福島を応援したいと考える県外の若者たちを増やしていくプロジェクトも開始しています。

福島をはじめ被災地の復興はまだまだこれからが正念場です。未来に希望を持つと踏ん張る人々を応援するため、引き続きご関心をお寄せください。

2014年3月11日現在実施中の東北支援事業の一部をご報告します。

中長期復興支援事業

Civic Force では、緊急時から約1年半にわたる支援活動の中で見えてきた被災地の課題解決に向けて、さらに腰を据えて取り組むため、2012年夏から「中長期復興支援事業」を続けています。各事業の進捗状況をご報告します。
<http://www.civic-force.org/emergency/higashinohon/choki/>

■観光再生プロジェクト

～“訪れたいまち”に向けた官民協働の仕組みづくり
宮城県気仙沼市が復興重点事項に掲げる“観光”の戦略立案をサポート。2013年7月には一般社団法人「リアス観光創造プラットフォーム」の設立に参画。

■命をつなぐ翼プロジェクト

～ヘリを活用した緊急医療搬送支援
震災以前から医療過疎が進む沿岸被災地で、医療搬送用ヘリを導入し、高度医療機関へのアクセス改善を目指す。2013年10月の本格運航開始後、要請に応じて患者を搬送。

■緑の“環”プロジェクト

～持続可能な林業と木質バイオマス活用を通じて地域を活性化
木質バイオマスの利用を通じて持続的な社会の構築を目指すプログラム。地元企業やNPOと協力し、個人林業者の育成や木材集積場の運営、地域通貨の試験的利用の面でサポート。

■共“還”まちづくりプロジェクト

～地域発・住まいとしごとの創造的復興チャレンジ支援
被災地で生まれたNPOや自治体と協力し、すでに集団移転を決めた地域の新しいまちづくりや、これからまちづくりを進めていく地域で専門家派遣や人材育成などを支援。

■夢を応援プロジェクト

～奨学金 × 地域発の教育プログラムで若者サポート
東日本大震災の影響で就学継続が困難な状況にある被災地の高校生が社会人になるまで、月3万円の奨学金を給付。野外教育プログラムや奨学生交流会も開催。



NPO パートナー協働事業

被災した人々が地域の復興に向けて主体的に取り組む事業をサポートしています。2011年4月からこれまでに37団体と49事業を実施。2014年3月現在、4件の事業を展開中です。
<http://www.civic-force.org/emergency/higashinohon/npo/>

■リアス観光創造プラットフォーム：気仙沼市の観光戦略を具現化する中核推進組織として、

パイロット事業などを実施中

■nina 神石高原：福島の被災者に対し広島県への集団避難と移転先でのコミュニティ維持再生を支援

■ネットワークオレンジ：10月に東北マルシェ開催。起業コンテスト受賞者向けフランス研修の詳細はP2

■気仙沼みらい計画大沢チーム：都市計画や建築の専門家チームが集団移転と復興まちづくりをサポート

東北支援
NOW

東日本大震災支援の寄付金執行状況

東日本大震災に関する寄付金について、2014年2月末日時点で約13.1億円(うち2012年3月より寄付額の15%を運営費に充当)のご寄付をいただいています。下記2月末現在の執行済み金額をご報告申し上げます。金額は暫定・速報値です。寄付金は、理事会の承認に基づいて執行しています。

なお、2013年度の決算と事業報告書はホームページで公開しています。

<http://www.civic-force.org/news/pdf/AR2013p1-20.pdf>

緊急・復旧支援活動	5億 5,652万円
緊急支援物資の調達・配送	2億 3,310万円
生活改善のための風呂設営	1,879万円
離島へのカーフェリー就航	1,998万円
NPOパートナー協働事業1・2期	1億 6,158万円
多目的・機能型拠点提供	7,213万円
ボランティア受け入れ用テント	3,688万円
復興支援調査事業	1,404万円
復興支援活動	4億 4,442万円
基金事業	9,584万円
企業ボランティア	260万円
NPOパートナー協働事業3期～	1億 7,087万円
命をつなぐ翼P*(中長期復興支援)	1億 904万円
観光再生P(中長期復興支援)	3,311万円
緑の環P(中長期復興支援)	1,872万円
共環まちづくりP(中長期復興支援)	1,424万円
現地事業を支える経費*	1億 1,412万円
合計	11億 1,506万円

* P=プロジェクト * 広報・資金調達に関連する費用を含む
 ※上記の他、ローソンと個人・団体寄付者の皆さまと協力して実施中の夢を応援プロジェクトでは5億8,798万円のご寄付をお預かりし、奨学金とサポートプログラムに3億3,231万円を執行済みです。
 ※1万円以下は四捨五入

国際ボランティア学会開催

被災地の現状を見直し、これからの日本について考える「国際ボランティア学会第15回大会」(主催・同実行委員会)が3月1日、早稲田奉仕園(東京)で開催されました。市民に開かれ、市民が関わり合いながら実現する「新しい公共」

「かざして募金」開始

携帯電話の利用料金の支払いと一緒に寄付できるソフトウェア「かざして募金」が3月5日から開始されました。「かざして募金」はアプリケーション(応用ソフト)をインストールしたスマートフォン

の實踐と、今後の方向性を再考することをテーマに議論が交わされました。東京で5年ぶりに開催された今大会では、シビックフォース代表理事の西健丞が実行委員長を務め、行政だけではできない復興支援の在り方を考え、実践してきた立場から、弊団体スタッフも運営に携わりました。



を、対象となるロゴやチラシなどにかざすだけで簡単に募金ができるサービスです。シビックフォースは、「かざして募金」の募金先の一つに登録されています。寄付金額は100円から選択し、月々の携帯電話料金と一緒に支払いできます。ぜひご利用ください。

被災地からのメッセージ

シビックフォースが東北地方で復興支援活動を開始してから3年。このコーナーでは、被災した地域で復興に向けて前向きに活動する人々を紹介します。今回は、一般社団法人コミュニティスペースうみねこ代表理事の八木純子さんに聞きました。



コミュニティスペースうみねこ
八木 純子 さん

—— 女川町出身で、震災前は保育士として保育園で働いていました。震災後1カ月は、食糧の確保や家族を探すのに必死でした。家族の無事を確認できた後、4月頃から避難所で保育士の資格を生かして何かできないかと、乳幼児の子守を始めました。また、避難所や仮設住宅で物資の配給、炊き出しなどの活動をしました。

保育所や学校が再開し始めてからは、高齢者の方のコミュニティ形成や生きがいづくりにつなげることができないかと、支援でいただいたTシャツを有効利用して布草履をつくることにしました。仮設住宅で暮らす60代から80代までのお母さんたち約10人に集まってもらい、製作を開始。初めて商品として出したのは、震災の年の秋、神奈川の逗子で行われた市民まつりの時です。全て完売し、買ってくださった方全員の写真を撮り、お母さんたちに見せると、大喜びでさらに前向きな気持ちになってくれました。生産を増やすと不良品が増えたり、ネット販売すると生産が追い付かなくなったり、大変なこともあります。布草履があったから良かったとお母さんたちにしみじみ言われたときは嬉しかったですね。布草履を話題に、色の組み合わせをどうしようとか、材料の厚さに応じて幅を変えようとか会話が弾み、年齢の差を超えて助け合い、自然に結束が強くなったように思います。